

待降節第1主日礼拝説教「神が来られたならば」

日本基督教団石神井教会 2019年12月1日

【旧約聖書日課】イザヤ書 52章1～10節

1 奮い立て、奮い立て

力をまとえ、シオンよ。

輝く衣をまとえ、聖なる都、エルサレムよ。

無割礼の汚れた者が

あなたの中に攻め込むことは再び起こらない。

2 立ち上がって塵を払え、捕らわれのエルサレム。

首の縄目を解け、捕らわれの娘シオンよ。

3 主はこう言われる。

「ただ同然で売られたあなたたちは

銀によらずに買い戻される」と。

4 主なる神はこう言われる。初め、わたしの民はエジプトに下り、そこに宿った。

また、アッシリア人は故なくこの民を搾取した。5そして今、ここで起こっていることは何か、と主は言われる。わたしの民はただ同然で奪い去られ、支配者たちはわめき、わたしの名は常に、そして絶え間なく侮られている、と主は言われる。6それゆえ、わたしの民はわたしの名を知るであろう。それゆえその日には、わたしが神であることを、「見よ、ここにいる」と言う者であることを知るようになる。

7 いかにか美しいことか

山々を歩き巡り、良い知らせを伝える者の足は。

彼は平和を告げ、恵みの良い知らせを伝え

救いを告げ

あなたの神は王となられた、と

シオンに向かって呼ばわる。

8 その声に、あなたの見張りは声をあげ

皆共に、喜び歌う。

彼らは目の当たりに見る

主がシオンに帰られるのを。

9 歓声をあげ、共に喜び歌え、エルサレムの廃虚よ。

主はその民を慰め、エルサレムを贖われた。

10 主は聖なる御腕の力を

国々の民の目にあらわにされた。

地の果てまで、すべての人が

わたしたちの神の救いを仰ぐ。

【福音書日課】ヨハネによる福音書 7章25～31節

²⁵さて、エルサレムの人々の中には次のように言う者たちがいた。「これは、人々が殺そうとねらっている者ではないか。²⁶あんなに公然と話しているのに、何も言われぬ。議員たちは、この人がメシアだということを、本当に認めたのではなからうか。²⁷しかし、わたしたちは、この人がどこの出身かを知っている。メシアが来られるときは、どこから来られるのか、だれも知らないはずだ。」²⁸すると、神殿の境内で教えていたイエスは、大声で言われた。「あなたたちはわたしのことを知っており、また、どこの出身かも知っている。わたしは自分勝手に来たのではない。わたしをお遣わしになった方は真実であるが、あなたたちはその方を知らない。²⁹わたしはその方を知っている。わたしはその方のもとから来た者であり、その方がわたしをお遣わしになったのである。」³⁰人々はイエスを捕らえようとしたが、手をかける者はいなかった。イエスの時はまだ来ていなかったからである。³¹しかし、群衆の中にはイエスを信じる者が大勢いて、「メシアが来られても、この人よりも多くのしるしをなさるだろうか」と言った。

「奮い立て、奮い立て」

「待降節（アドヴェント）」を迎えました。聖壇の装いも先週とは打って変わって、祈りの期節に入ったことを示す「しるし」で整えられています。明るい真昼の礼拝であっても、普段用いないロウソクが灯されるだけで、わたしたちの祈りが一つのところへと集められ、深められていくようです。

前任地の教会では、待降節に入ると教会学校の子どもたちの朝の集まりがすこぶる良くなっていました。石神井教会でもそうですが、待降節の期間、9時からの礼拝を、聖壇に置かれた「アドヴェント・キャンドル」を灯すことから始めていたからです。その点燭の奉仕が、礼拝が始まるよりも早くに来た子どもたちの中から選ばれることを、皆知っていたからです。普段遅刻の多い子どもでも、この季節ばかりは、一所懸命に朝、布団から這い出して、教会に来ていたのです。

待降節の聖書日課朗読は、「**奮い立て、奮い立て**」という呼びかけから始まっていました。一年前に出版された新しい翻訳では、「目覚めよ、目覚めよ」となっています。少し印象が変わりましたが、要は、寝ている者、寝転んでいる者に向かって、「起きよ、起き上がれ」と呼びかけているのです。力なくだらけて横たわっているので、「シャンとしなさい」と叱っているのです。朝、どれだけ起こしてもベッドから出てこない子らに声を上げ続ける親のように、です。

待降節に整えられる多くの「しるし」は、わたしたちの目覚めを促すために、先達が工夫してきたものです。教会の中だけではありません。町中の至るところに飾られた「しるし」が、わたしたちの目を惹きつけ、眠っていた意識を覚醒させるように働きかけているのではないのでしょうか。その「しるし」は、わたしたちの中で、あの一つのこと、神の御子キリストのご降誕の出来事を呼び覚まさせるのです。けれども、その「しるし」の指し示すものが何であるのかを知らなかったならば、それを忘れてしまったならば、どれほどの「しるし」を示されようと目を覚ますことがなくても、仕方のないことかもしれません。

「あなたの神は王とられた」

御子のご降誕を祝うクリスマスを、わたしたちは、心待ちにしています。教会の歴史の中では、主のご復活を祝うイースターよりも、聖霊の降臨を記念するペンテコステよりも、ずっと遅れて祝われるようになったクリスマスですが、多くの者がどの祭よりも楽しみにしてきました。多くの教会で、子どもたちと共に降誕劇が演じられます。待降節とクリスマスのために作られた数えきれないほどのキャロルが、歌われることでしょう。リースやロウソク、ツリーの飾りは、もはや教会や信者だけのものではありません。だれもが心待ちにし、そのときを幸せな気持ちで迎えられる祭。そのような祭に備える期節として、わたしたちは「待降節」を迎えました。

その祭のときに、わたしたちは、一人の嬰兒の誕生という出来事に目を向けることになるでしょう。少しばかり困難な状況の中で生まれた赤子ですが、その出来事の物語は、牧歌的な優しさに包まれたものでもあるのです。それは、すべての者を包み込む大きな愛の物語と言っても良いでしょう。信じる者だけでなく、信仰深い者だけでなく、信じない者も、信じることのできない者も、あらゆる者を受け入れ、包み込んでしまうような、愛の物語です。両親のもとで静かに寝かされている幼子の姿には、そのような力があるのでしょうか。

だからこそ、教会は、教会の外にいる人々に向けて、「クリスマスには教会へ」と呼びかけてきました。イースターやペンテコステには難しくても、クリスマスであれば信者でない方を教会に迎えやすい、と思うのです。実際、クリスマスイブの聖夜礼拝には、信者ではない方のほうが多くおいでになられるほどです。

ところで、そのような愛に満ちた牧歌的な祭を迎えようというときに、「実は、その幼子として生まれる方は、わたしたちの王なのです」と言い出すのは、場違いに思われるでしょうか。今日の旧約日課は、まさにそのことを待降節の初めに言わなければならない、教会が選んで来た御言葉なのです。

「奮い立て、目覚めよ」と呼び起こして、何をさせようとしているのか。「王」として来られる方を、それにふさわしく迎えよと、命じているのです。

わたしたちは、この年、この国で「皇位」を継承された方が即位するという一連の儀式を見てきました。三十年前ほどではありませんが、その儀式の行なわれ方に対して賛否の議論がありました。わたしの個人的な関心は、むしろ、その一連の儀式に際して、多くの人々がどのような態度を示されるのか、ということにありました。「王」が権力を持っている時代ではありませんが、にもかかわらず、新しい王を迎えるという出来事に対して、どのように行動し、反応するのか。それは、わたしたちが、預言者イザヤが「あなたの神は王とられた」と告げ、キリストを「王」として迎えるように教えられているときに、どのように行動し、反応するべきなのかを考えるヒントになるのではないかと、思ったのです。

確かに、幼子イエスの誕生は、わたしたちの誕生と何も変わるところのない出来事です。しかし、それは、自分の息子、娘の誕生と同じだとしてよいのか。「王」として迎えよと教会が教えてきたのは、どういうわけなのでしょう。

「見よ、ここにいる」という方をお迎えするために

先週、ローマ・カトリック教会のフランシスコ教皇が来日され、短い滞在の間に教会関係のみならず多くの行事をこなされて、帰国されました。皆さんも、ニュースなどでその様子をご覧になられたことでしょうか。わたしは、カトリック教会の公式サイトでライブ中継されていたものの中から、長崎と東京の球場で何万人も集めて行われた「教皇ミサ」の様子を見させていただきました。

ミサそのものは、整然と厳粛に執り行われていましたが、ミサが始まる前、教皇が会場に入って来られた際の様子には、圧倒されるものがありました。「パパモービル」と呼ばれる特別仕様のオープンカーに乗って入場された教皇は、まっすぐ聖壇に進むのではなく、会場の通路をゆっくりと巡って、迎えた人々の歓迎を受けられたのです。中でも印象的だったことには、テレビなどでも紹介されていましたが、祝福してもらおうと差し出された赤ん坊を、教皇はご自分の手元に引き寄せて口づけして祝福される、ということを繰り返されていたのです。カトリック信徒の方たちの中で教皇という存在の大きさをあらためて見せられたように思いました。

翻って、わたしたちの教団を代表する教団総会議長が来訪されても、わたしたちは、あれほどの歓迎をすることは決してないだろうと思うのです。わたしたちの教会関係であれほどの歓迎を受ける人は、かつてはいらっしゃいましたが、今はもう無いでしょう。それは、「神ならぬ者を崇めてはいけない」という信念にもよることだと思えますし、それは大切な信仰の姿勢です。わたし自身は、教会でお互いの誰かのことを「先生」と呼んではいけない、とさえ教える教会で育ちました。

けれども、わたしは、そのような信念があるからといって、何十年ぶりに来日された教皇を大歓迎したカトリック信者の皆さんを揶揄するつもりは、一切ないのです。むしろ、うらやましくさえ思います。それは、あの人たちが、あのように教皇をお迎えするというを通して、神が来られたときにどのようにお迎えすべきなのかということを考え、予行演習をされているのだと、言えるからです。彼らは、教皇がいることは知っていても、実際に迎えるのは何十年に一度です。わたしたちが、神があられることは知っていても、実際に目に見える実感を伴ってお迎えすることになるのは、一生涯の中で幾度もないに違いない。そのとき、貴い方をお迎えする術をあらかじめ考え、実践してみたことがあるかどうかによって、わたしたちの取り得る態度、行動は、大きく違ってきてしまうのではないのでしょうか。

幼子を迎える祝いに備えて、教会堂の入口に特別製のリースを飾ってくださいました。「克蘭ツ（冠）」とも呼ばれます。わたしたちが、「王」をお迎えする「しるし」です。お迎えしたお方に、わたしたちは、あの克蘭ツ（冠）を戴いていただくのです。そのようにお迎えするのです。そのようにして、今はまだ目にする事ができていないかもしれない真の神のご来臨に、わたしたちは備えることになるのです。